

# 統計調査部のあゆみ

首藤佳子  
(星ヶ丘厚生年金病院図書室)

昭和59年度に近畿病院図書室協議会（以下協議会と略す）の各事業が部制になり統計調査部が新たに設けられた。それまでは幹事の中での担当は決まっていたが、はっきりと一つの事業部として確立したのはこの年であった。

統計調査部の仕事は、重複雑誌の調査および重複雑誌目録の作成、年次統計調査の実施と報告書の作成である。協議会では設立以来、さまざまな調査を行ってきたが、そのうち継続事業となっていた重複雑誌の調査と相互貸借統計をこの部が担当することになった。その他の単発的な調査はそれぞれ必要に応じて担当者を決めて行うこととした。

## 1. 重複雑誌の調査と目録作成について

このうち、重複雑誌目録の作成は古く昭和50、51年度から取り組みを始めた。重複雑誌の交換の意義についてはここで改めて述べる必要もないが、夜間の無人開館が多く、そのため行方不明になる未製本雑誌が相当数にのぼる病院図書室では他の館種の図書館に比してその必要性が高いと思われる。また、外国雑誌の入荷については不確実な要素も多く、重複して入荷するものや未着のものが出る可能性が高いこと、未着の場合の補充に時間がかかること、バックナンバーの購入は高価なものにつくこと、和雑誌の寄贈がかなりあること、等もこの事業を継続している理由である。重複雑誌については、本来重複して入荷したものは契約している書店に返すべきだという意見もあるが、はっきりとした決まりはないので、こうした相互の交換を行っているわけである。この事業を始めるに当たっては、会報第3巻2号で山室真知子さん（京都南）が「欠号補充のための不要重複雑誌の交換」と題してその必要性や実施の方法等を会

員向けに説明している。

### (1) 現在までの重複雑誌目録

重複雑誌目録が当協議会で初めて作成されたのは、1978年1月であった。現在までの重複雑誌リスト、目録の作成時期と編集者等は表1のとおりである。

### (2) 重複雑誌目録の構成

重複雑誌目録は次のような構成で作られている。

- ① 収録誌の範囲：医歯薬学関係・病院管理学関係・図書館学関係の逐次刊行物および二次資料で各図書室が重複して受け入れているもの。
- ② 収録誌の区分：I 欧文誌（外国雑誌及び国内欧文誌）、II 邦（和）文誌
- ③ 配列：誌名のABC順（邦文誌はヘボン式でローマナイズ）、欧文誌は冠詞、接続詞、前置詞を無視する。
- ④ 記載方法：
  - A. 誌名：欧文誌のタイトルは、Index Medicusの略誌名法による略誌名を用いる。欧（和）文誌はFull Title。
  - B. 発行年：通巻号表示のもののみ附記。
  - C. 所在表示：  
1978-1980年：「病院図書室医療関係雑誌所在目録 1975」の病院代表番号  
1981-1983年：「医学雑誌総合目録、欧文編 1981」の病院代表番号  
1984-1987年：「医学雑誌総合目録、和文編 1984」の機関コード  
1988年：「協議会会員名簿、1988」の機関コード  
1989年：「協議会会員名簿、1989」の

表 1. 現在までの重複雑誌目録

発行年月日	収録範囲	収録数	参加施設数	編集者	特記事項
1976				林（社保神戸中央）、山室（京都南）	会報誌上で3回に分けて掲載
1977. 8. 31	1977. 8 現在	254	17	川原（星ヶ丘）、林（社保神戸中央）、小田中（国立京都）、福味（国立大阪）、石井（京都保健衛生）	福井県立病院特別参加（31 タイトル）
1979. 1. 31	1977. 6-1978. 12	139	19	北村（松下健保）、山崎（淀川キリスト）	
1980. 12	1979. 1-12	127	24	林（社保神戸中央）、松本（住友）	
1981. 11. 15	1980. 1-12	158	25	同上	会長通達で1979年以前の重複雑誌は廃棄可と。
1983. 2. 1	1981. 1-12	106	20	同上	補遺版（大津赤十字病院重複雑誌リスト）発行
1984. 3. 1	1982. 1-12	152	20	林（社保神戸中央）、松本（住友）、湯浅（行岡保健衛生）	1982 年以前発行のものの追加リスト付
1984.	1983. 1-12	133	22	林（社保神戸中央）、松本（住友）	部制になる
1985. 12. 1	1984. 1-12	140	21	湯浅（行岡保健衛生）、林（社保神戸中央）	1985. 8 アンケート実施 高槻赤十字、西宮市立中央のリスト別掲 1972-1983 の未掲載重複雑誌リスト付録（4 P） 重複雑誌の保管交換期間は2年間と決定
1986. 8. 31	1985. 1-12	192	23	首藤（星ヶ丘）	重複雑誌保管期限変更 2年間 → 目録発行日から次回発行日まで
1987. 7. 6	1986. 1-12	153	23	北沢（国立大阪）、首藤（星ヶ丘）	
1988. 7. 25	1987. 1-12	157	22	首藤（星ヶ丘）	
1989. 8. 10	1988. 1-12	140	26	松本（住友）	

## 機関コード

D. 出版地、出版団体：当初は必要な場合に限り、欧文誌は出版地を、邦文誌には出版団体を記していたが、1985年より省略している。

- ⑤ 雑誌の交換方法：「重複している雑誌をもらって欠号補充をしたい図書館は、該当雑誌所蔵図書館へ直接申込みの上、送料および交換の手続き、有料・無料の別、等について問い合わせること」となっており、郵送費は原則として雑誌を受け取る図書館が負担することになっている。
- ⑥ 雑誌の保管および交換期間：1985年より定められた項目で、最初の年はその期間を2年間としていたが、アンケート調査の結果より各図書館の保管スペース等に問題があることがわかり、1986年からは目録発行日より次回目録発行日までとなった。

(3) 重複目録に関するアンケート調査について  
重複雑誌目録はこのように永年に亘って作成されてきたが、果してこの目録の利用はどのくらいなされているのかが不明であったため、1985年、1988年にアンケート調査が行われた。

1985年のアンケート調査では、重複雑誌目録の利用、重複雑誌の申込受付状況、製本時期、重複雑誌の必要性、重複雑誌目録に関する意見等を聞いている。回答率約55%でこのうち、この目録に目を通すひとは90%、現実に所蔵重複雑誌の申込を受けた機関は40%、重複雑誌目録が必要であると答えたひとは約80%であった。目録に関する意見では、発行時期の改善、提出リスト作成に時間がかかる、版元記入は不要、保存期限の短縮等の意見が多かった。1988年の調査は、調査時期、目録送付時期、利用状況、その他について自由記入で行った。多くの意見が寄せられたが、調査の時期や目録送付時期に関しては余りにも意見がマチマチのため現行のままとし、「重複雑誌の調査は年次統計に含めるべきである」「重複雑誌の保管交換期限をさらに短縮すべきである」「現在と逆の方法 — 各図書館の欠号を早い時期に知らせる補充を図る方が合理的」等の意見についてはさ

らに検討してみるようになった。

以上のような2つの調査の結果、その必要性について再認識するとともに、種々改善を加えながら現在まで継続されている。今後もできるだけ会員の要望に添った目録を作り、より一層活用されることを望みたい。

## 2. 年次統計について

はじめにも述べたように、当初協議会では相互貸借の件数のみを調査していた。これは、元来協議会が主として文献の相互利用を中心に活動してきたことから、その推移に関して関心が深かったためである。しかし、昭和56年度より「図書館に関する統計」調査も行うことになった。第7回総会においては、ちょうど協議会総合目録欧文編が改訂されるのを機に、従来の相互貸借統計を改善して貸件数も調査することのみが決まったが、その後の幹事会において討議した結果、もっと多項目に亘る統計も並行して行うことになった。これは病院図書館の活動や状況について数値を出す必要がある場合はその都度調査が必要で、度重なる調査は依頼者側にも回答側にも負担が大きいことや、協議会加盟図書館の継続的な状況把握の必要性から「年次統計」という形で毎年実施することになった。当初2年間は従来の相互貸借統計と年次統計は別に行っていたが、1986年から年次統計のなかに全て組み込まれるようになった。

担当者は実施当初から1984年まで林伴子さん（社保神戸中央）が中心で、松本純子さん（住友）が手助けをしてこられた。1985年に湯浅伸一さん（行岡保健）が統計調査部長となり、林さんがそれをサポートして調査が行われ、1986年は首藤佳子（星ヶ丘）に、1987年は北沢洋子さん（国立大阪）にと引き継がれていった。この1987年は10月に北沢さんが急に退職されたため、年次統計の集計、報告書の作成等は下浦敦子さん（国立大阪）、中嶋和子さん（西宮市立中央）、首藤佳子（星ヶ丘）の3名が受け持った。1988年は再度首藤佳子（星ヶ丘）が担当し、1989年度になって松本純子さん（住友）にバトンタッチした。

この統計調査部は少数精鋭主義で担当者はわず

かに一名、担当となったものは1年間心身ともに健やかであることが義務づけられる。

#### (1) 年次統計の項目と記入方法について

年次統計の実施にあたっては、加島民子さん（大阪回生）や松本純子さん（住友）、林伴子さん（社保神戸中央）等が中心になって、JMLAの年次統計を参考に病院図書室向けの統計項目を作成した。この項目や記入方法については、以後何度も変更されてきているが、全ての会員の希望に添った形のものはないが作成しにくく、未だに試行の段階にある。ただし、早く統計フォームを統一して欲しいという会員からの声もあり、早い時期に確定したフォームを作る必要がある。現在の項目は、表2のとおりである。

このうち、現在まで変更があったのは以下の点である。

- ① 「施設」の中に座席数の項目が増えたこと。
- ② 「職員」の項目の記入方法。
- ③ 「蔵書」の項目及び記入方法。
- ④ 「経費」の項目数、項目のとり方。
- ⑤ 「利用」についての項目が整理されたこと。
- ⑥ 「相互貸借」が全て年次統計に組み入れられ、記入方法が変化したこと。
- ⑦ 「貸出」の記入方法。
- ⑧ 「視聴覚資料・機器」の項目及び記入方法。
- ⑨ 「二次資料」の対象資料が決ったこと。

特に、経費の中に情報サービス費としてオンライン検索や相互貸借の費用、AV資料の購入費の項目が新しく設けられたり、採用目録や蔵書の項ではコンピュータ管理、他所蔵しているコンピュータソフト記入欄が新設されるなど、コンピュータリゼーションの影響がはっきりと現れている。

協議会の統計項目がこのように頻繁に変更されてきたのは、やはり病院図書室間の機能の不統一が大きな原因だといえる。図書室のあり方の相違や業務面での差異が一律の統計項目による調査を不可能にしているのである。したがって、現在までどのようにしたらより妥当な統計が出せるかということで試行錯誤を繰り返した結果が、このような変更になったといえるのではないかと協議会

の統計が各図書室の実状に必ずしもマッチしていない面があることは否定できないが、この協議会統計を行う目的の一つには、これによって各図書室においても数値的な図書館活動のデータが蓄積できるようにすることもある。各会員にそのような意図も十分理解してもらって、今後の統計事業がスムーズに運ぶよう期待したい。

表2 現在の協議会統計調査項目

- |   |
|---|
| a. 施設の現況<br>（施設名、病床数、全職員数、図書室正式名称、担当者名、図書室の組織上の所属、所属長職名）                |
| b. 施設・建物<br>（設置様式、延面積および各スペースの面積、座席数）                                   |
| c. 職員<br>（図書室職員総数、性別職員数、資格別職員数、勤務形態別職員数、雇用形態別職員数、経験年数）                  |
| d. 図書委員会<br>（有無、構成人員、開催回数）  |
| e. 蔵書<br>（所蔵図書累計、年間受け入れ図書冊数、除籍図書冊数）                                     |
| f. 経費<br>（資料購入費、製本費、検索・相互貸借費）   |
| g. 整理業務<br>（分類法、目録種類）   |
| h. 利用者サービス<br>（サービス対象、利用規定、実施サービスの種類、貸出統計、長期貸出先と冊数、相互貸借統計、レファレンスサービス統計） |
| i. 視聴覚資料<br>（所蔵視聴覚資料の種類、視聴覚機器）  |
| j. 図書室出版物   |
| k. 所蔵二次資料   |

## (2) 集計について

会員により提出されたデータの集計は、当初は全て手作業で行われていたが、統計報告書を出すようになった1986年からdBASE-Ⅲを使ってコンピュータ処理をするようになった。この時は、当時の担当者が慣れないコンピュータに取り組んで四苦八苦したものである。しかし、この結果、一度入力したデータがさまざまに利用でき、転記等の手間も省けるようになった。また、調査用紙等の保管やデータの集積についての苦勞がほとんど解消された。1987年には一部LOTUS、1・2・3を使っての入力がなされたが、担当者の退職により再びdBASE-Ⅲに、1988年にも同じくdBASE-Ⅲ、そして現在はdBASE-Ⅲ PLUSと使用ソフトが変わっている。

ただし、この年次統計の集計は思いの外煩雑な作業で、各施設によって数字の出し方が異なったり、状況の違いからいろいろと条件づけがなされていたりで、とても機械的に処理できるものではない。集計を担当する者は回答用紙を前に「どこから手をつけようか、どんな風にまとめたらいいか」と暫し呆然としてしまうのが常である。ここでも、良く言えば画一的でない多様性をもった病院図書室、悪く言えば標準化されていない病院図書室の実態をみることができる。したがって、コンピュータ処理できる項目に限りがあり、現在のところはその利点を十分に生かしきれていない。項目、記入方法等を統一できるよう、会員の協力を得て、もっとすっきりした形の統計が出せるようにしたいものである。

また、毎年少しずつ項目や集計の仕方が変わっている箇所があり、その上提出病院が一定していないことなど継続的に考察を加えるには不向きな点があることも事実である。

## (3) データの公表について

統計のデータ公開に関しては、さまざまな意見があり、病院によってはデータの公表をするなら参加できないというところもあったため、当初は整理したデータを事務局で保管して随時問い合わせに応じるという態勢を作った。「公表するか否か」に関しては、その後何度も議論がなされ、迂

余曲折を経てようやく昭和61年度から毎年、個々のデータを加工した形の現在の調査報告書が出されるようになった。それ以前の調査については、「病院図書室」第4巻に林伴子さん（社保神戸中央）、松本純子さん（住友）が共著で「近畿病院図書室協議会年次統計4年間の集計」と題して1980年から1983年の集計報告を行っている。したがって、現在までの調査で、それがいかなる形でも発表されなかったのは昭和60年度に調査が行なわれた1984年のデータのみである。一部の会員からは、各施設毎のオリジナルなデータが見たいという要望があるが、その場合は従来通り事務局に問い合わせてもらふこととし、統計調査報告としては、あとしばらくの間はこの形で継続される予定である。

## (4) 統計調査報告書の作成について

報告書の作成は印刷費用を節約するため、ワードプロセッサを用いて版下作成を行い、刷りと製本は印刷所に依頼している。作成部数は150部、印刷費用はおおよそ3万円程度である。報告書のフォームがほぼ決まり、ディスクに蓄積してあるので、その都度改めて枠組みを作る必要がなくなり、この点でも当初に比べて省力化されてきている。

## (5) 年次統計に関するアンケート調査について

協議会では1988年7月に年次統計に関するアンケート調査を実施した。このアンケートは調査項目、記入方法、集計および報告の方法、その他の4項目について会員の意見を聞くもので、実に多くの意見が寄せられた。

調査結果は第15回総会資料として会員に配布したので省略するが、これらについては幹事会で報告され、寄せられた意見の一つ一つについての検討がなされた。しかし、このような多くの意見の調整はなかなか難しく、今後の課題として継続して討議する必要がある。

## (6) 現在までの統計調査からみた協議会会員の状況について

現在までの統計から、病院図書室に関する主な

項目の推移を挙げると以下ようになる。

A. 各年の統計調査回収の状況

発行年	調査期間	参加病院数	参加率
1981	1980.4-1981.3	43/54	79.6%
1982	1981.4-1982.3	40/56	71%
1983	1982.4-1983.3	34/60	57%
1984	1983.4-1984.3	38/62	61%
1985	1984.4-1985.3	46/63	73%
1986	1985.4-1986.3	45/63	71%
1987	1986.4-1987.3	53/67	79%

B. 施設

a. 併設の施設数の推移

1980年	23/43 (57.5%)
1981年	13/40 (32.5%)
1982年	10/34 (29.4%)
1983年	11/38 (28.9%)
1985年	15/40 (37.5%)
1986年	15/45 (33%)
1987年	14/53 (26%)

b. 面積

	平均	最大	最小
1985年	153㎡	562㎡	25㎡
1986	171㎡	868㎡	20㎡
1987	169㎡	868㎡	25㎡

※ 1985年以前は「病院図書室」第4巻の報告を参照のこと。

C. 職員

職員は1図書室あたり平均1.4名で、これは各年同様な数値で推移している。

a. 職員中に司書の占める割合

	司書の人数	その割合
1980年	25名	46.3%
1981	24	44
1982	20	39.2
1983	18	37.5
1985	20	36
1986	26	44
1987	31名	42

b. 専任を置いている施設の割合

1980年	48.7%
1981	54.1%
1982	45.4%
1983	40%
1985	52.5%
1986	55%
1987	55%

D. 資料購入費

1985年	平均619万円
1986	604
1987	564

※これは図書館経費のうち、単行書および雑誌の購入費のみである。

※ 1985年以前は「病院図書室」第4巻の報告を参照のこと。

E. 蔵書

1985年	平均	8,505冊
1986		10,189
1987		10,075

※ 1985年以前は「病院図書室」第4巻の報告を参照のこと。